第三章　　柳橋出会（しゅっかい）茶屋

一

朝まだき、坂崎磐音が九ヶ月ぶりの懐かしい音を聞いていた。

竹刀（しない）と竹刀の打ち合わされ、竹刀が防具に叩く鈍い音である。そして、間断（かんだん）なく気合いが重なった。

神田三崎町で直心影流の看板を三代に渡って掲げる佐々木道場に、大名家の家臣や幕臣旗本の子弟（してい）たちが多く通っていた。

磐音は豊後関前藩から剣術修業を許され、三年間汗を流した。最初の一年は住みこみ稽古、残りの二年は江戸屋敷から通いながらの修業である。

途中から小林琴平と河出慎之輔が加わった。

帰国に際して佐々木玲圓道永は、最後の稽古をつけてくれた。そして、国許の中戸信継のもとでさらに稽古を積むよう、戒め（いましめ）の言葉とともに目録を磐音と琴平に授けてくれた。

藩政を一新する望みを抱いて江戸を痕にして九ヶ月足らず、磐音の身辺は大きく変化していた。

磐音は羽織を直すと門を潜った。

この頃、佐々木道場は門弟（もんてい）の数と、厳しい稽古により、江戸随一の道場として知られていた。

玄関横の庭では素足（すあし）で木剣（ぼっけん）の素振りを繰り返す若い門弟が二人いた。これは足裏に体の運びと、動きを覚えこませるためだ。

ふたりとも磐音の見知らぬ顔であった。

磐音が式台の前で一礼すると草履を脱ぎ、備前包平を腰から抜いた。

早朝、関前半の通い稽古の門弟たちはまだ顔を見せない刻限だった。

百余畳の道場では、二十数名の弟子たちが延び延びと続く打ち込み稽古を繰り広げていた。

磐音は板の間の端を上段の間に向かった。すると、神棚（かみだな）の前に正座して弟子たちを見守っていた佐々木玲圓の視線が磐音を認めた。

道場の端に正座すると板の間に額を擦りつけた。

不意に稽古の音がやんだ。

平伏する磐音を静寂が包んだ。

「坂崎磐音、頭をあげよう」

「はい」

磐音が顔を上げた。

師の視線が磐音を見詰めた。

師弟は長いこと無言の会話を繰り返した。

（よう戻ってきたな）

豊後関前藩で神伝一刀流の道場を開く中戸信継を通じて、磐音らに起こった悲劇のすべてが玲圓に伝わっていた。

磐音は師を拝顔した。

（お懐かしゅうございます）

「磐音、相手せよ」

玲圓が不意に立ち上がった。

「はっ、はい」

脇差しを抜き、羽織を脱いだ磐音に、内弟子の一人、今戸永助が木剣を差し出した。

「お借りする」

稽古を中断していた門弟たちが道場の左右の壁に下がって正座した。

師と弟子は道場の中央に立った。

師匠も弟子も正眼を取った。

磐音は頭裏に、

「己はこの場に立つ資格があるのか」

という疑いを去来させた。

道場は剣を修業する者にとって清浄なる場であった。

佐々木は常々、

「剣の修業は人を斬るためのものにあらず」

と教え諭してきたのだ。

この九ヶ月、磐音が藩命や生計（たつき）のためとわいえ、血を見る戦いを繰り返してきた。

磐音の五体には死の臭いがこびりついていた。

「参る」

相正眼の佐々木玲圓は声を発すると、巌（いわお）のように押し寄せてきた。

直心影流の流祖山田平左衛門光徳一風斎（やまだへいざえもんみつのりいっぷさい）と兄弟弟子の祖父佐々木周太月湛（しゅうたげつたん）からもう稽古をつけられ、才能を開花させた玲圓道永は、

（炎の剣）

として江戸の剣術界に知られていた。

全身からメラメラと熱を放射しながら師が磐音に殺到してきた。

その瞬間、磐音は踏み込みつつ、師の攻撃を迎え撃っていた。

木剣と木剣が絡み合い、乾いた音を発した。

玲圓は、

（これは…）

と思いつつ、二撃目を右の肩口に落とした。

磐音が払った。

今度は磐音が仕掛け、玲圓が払った。

使徒で絵師は目まぐるしく攻守所を変えながら、木剣を振るい続けた。

どちらかが受け間違えば、致命的な怪我をした。いや、死さえ想起させるほど激しい打ち合いになった。

居眠り磐音、居眠り剣法のいわれは、

（待ちの剣）

の剣風からだ。だが、対決する磐音には、柔らかく受け流す居眠り磐音は感じられなかった。玲圓の攻撃に耐えながらも無意識のうちに反撃の機を窺っていた。

玲圓の木剣から炎が立ち上った。

連鎖した攻撃が鋭さを、激しさを、早さを増した。

磐音は師が炎と化したとき、初めていつもの自分を取り戻していた。

無意識のうちに秘めた攻撃の構えを捨てた。

無念無想、受けの剣が戻ってきた。

炎と水が正確無比（せいかくむひ）にぶつかりあっていた。

四半時以上も続いた。

門弟たちは固唾（かたず）を飲んで凝視（ぎょうし）していた。

玲圓の木剣が磐音の眉間に鋭く落とされ、磐音が力を殺ぐ（そぐ）ように受けた直後、玲圓が磐音の傍らを駆け抜けて、くるりと反転した。

「引け、磐音！」

言葉を聞く前に磐音は床の上に屈して頭を下げていた。

「みたな」

玲圓が門弟立ちを見回した。

押し堪えた息とともに

「はっ」

という応答が道場に響いた。

磐音は井戸端で顔と手足を洗った痕、師匠の居間に通された。

玲圓が稽古着から普段着に着替えて姿を見せた。すると間合いを見ていたように熱い茶と梅干し（うめぼし）が供された。

運んできたのは、内弟子の今戸永助だ。磐音の弟弟子にあたり、出羽（でわ）山形藩から剣の修業に来ていた。

玲圓が茶碗を取って茶を喫した。

「磐音も飲むがよい」

と許しを与えた。

そのせい声音（こわえ）は実に優しかった。

「先生」

と言いながら師範代の浅村新右衛門が入ってきた。

その顔に興奮が漂っていた。

「それがし、長年道場に関わってきましたが、あのように炎がメラメラと燃え上がる試合を拝見したの初めてにございます」

玲圓が静かに頷いた。

「居眠り磐音の剣法は、新たな域を得たな」

生死の境を潜り抜けた経験を得られた境地と、その場にあるものは知っていた。

その時、磐音が孤独を感じていた。

師のもとに帰るべき途が絶たれていた。

「先生、己の無能を悟っています」

その場を去ることができずに残っていた永助が吐露した。

「永助。磐音に恐れを抱いたのか」

「はい、江戸を発たれた時の坂崎様ではありませぬ。違ったお方がここにおられます」

今戸の顔には畏怖（いふ）と尊敬があった。

「永助、剣の道は一筋ではない。百人おれば百通りの修行仕方が、到達すべき境地がある」

「はい」

「そなたはそなたの道をみつめるのじゃ」

「はい」

「い‘わねが豊後関前をでたと中戸先生より便りをもらうたとき、直面すべき現実から逃げたのかと心配致した。杞憂であったわ」

玲圓が静かに破顔した。

「いえ、にげたのでございます」

磐音は正直に答えた。

玲圓は首肯すると茶を飲んだ。

「磐音、そなたの長屋に押し入った者がいるそうではないか」

と訊いた。

「よくご存じでございますね」

「なあに、昨日、南町の与力どのがこちらに参られて、あれやこれやとそなたのことを聞いていかれた。あの御仁（ごじん）、ここに来る前にそなたの長屋も訪ねたとか。武家姿の泥棒が貧乏長屋に押し入ったことを不思議がっておられたぞ」

笹塚孫一は坂崎磐音を奉行所に待たせて、矢場あらしの隠れ家（かくれが）をと同時に磐音の身辺を徹底的に調べあげていた。なんとも油断のならない男だ。

「磐音、そなたが深川六間堀に住んでおることを知らせてくれたのは勘定奉行所の日村綱道どのでな」

やはり、と磐音が頷いた。

「そのことを承知しているのはそれがしと、ここにおる浅村だけだ」

師範代の新右衛門を見た。

「磐音、すまぬことをした」

新右衛門はいきなり頭を下げた。

「おれはな、うっかりとそのことを、豊後関前藩の江戸屋敷の使番（つかいばん）畦蔵多門（あぜくらたもん）どのに喋ってしまった。そなたの身辺にそのような大事が起こっていたとは全く知らなかったのだ。昨夜先生に聞かされて、己の口の軽さを恥じ入っていたところだ」

新右衛門は何度も詫びの言葉を口にした。

畦蔵は佐々木道場の古い弟子の一人だ。

「浅村様、どうぞご懸念なく…」

と磐音は新右衛門に言い返すと

「先生、長屋に入ったのは豊後関前藩の者だと思われますか」

と尋ねてみた。

「そなたの身過ぎ世過ぎは笹塚どのから、なんとなく聞いた。どう考えてもそちらの関わりとも思えぬ。それでな、あの与力どのに伝言を頼んだのじゃ」

「そうでございましたか」

「磐音、そなたは豊後関前藩と関わりを絶ったつもりでいるかもしれぬ。だが、相手はそうは考えておらぬのではないか」

「それがしには思いあたるところがございません」

「ならばよいが…」

玲圓はそう言うとその話題に蓋をした。

その夜、唐傘長屋におきねの通夜が行われた。

磐音が顔を出すと、矢場金的銀的の朝次とおすえの夫婦が悲痛な顔で、おきねの父母の傍らに座って話していた。

磐音は放心したままの両親に悔みをいうと、おきねの亡骸に線香を上げた。

「坂崎さん、大家さんの家におよしたちもいる。あって行ってくれませんか」

朝次がいった。

頷いた磐音が九尺二間の長屋を出ると、幸吉が何人かの子供と一緒に井戸端に立っていた。

「浪人さん、こいつら、おきね姉ちゃんの弟と妹たちなんだ」

磐音が頷くと

「おきね姉ちゃんに代わって、そなたらが父上や母上を助けるのだぞ」

と言いながら一番小さな女の子をなでた。

「坂崎さん、こっちだ」

長屋を出てきた朝次が大家に案内する気か、木戸口に向かった。

「親方、それがしがもう少し用心棒稼業を続けるべきであったな」

「私ももっと娘立ちの身辺に気を配るべきでしたよ。お互い言い出せばきりがない」

そういった朝次がくるりと振り向くと、

「昼間に、えらくちびっこい南町の与力がふらりとうちに顔を見せて、昨夜のことを告げて行きましたぜ。おきねの仇を坂崎さんは立派に討ってくだすったんだね」

「そのようなことくらいしかそれがしはできぬ」

「だれにでもできるこっちゃありませんや」

「親方の胸だけに仕舞っておいてくだされ」

朝次がうなずいた。

磐音は宮戸川に鰻裂きに通う日々に戻った。

給金は日当七十文だが、たっぷりした朝餉がついた。だから、夕刻に雑炊（ぞうすい）を炊いてたべるだけでなんとか一日がしのげた。だが、一日七十文で殺ぐせるわけもない。

朝次からもらった一両一分一朱は、一両を柳次郎に返して一分一朱が残った。それも使い果たした。

「なんとかしなければ」

そんなことを考えながら、磐音はその日も宮戸川の裏口を出た。

（だいぶ朝風呂にも行ってないな）

と思いながら六間堀に出ると、品川柳次郎が堀端に立っていた。

「鰻割きは終わりましたか」

頷いた磐音が言った。

「品川さんはしじみ採りをしていたそうですね」

「寒い上に銭にならないのでやめました」

柳次郎はあっさり言うと、

「新手の仕事を見つけました」

「それは良かった」

「坂崎さんも一緒です。おれ一人ではできないのでね」

「なにっ、それがしも」

磐音は思わず喜びのけを上げた。

「やりますか」

「懐には、今もらったばかりの七十文しかありません。また家賃を溜めてしまいましたし、なんとかしなければと考えていたところです」

「仕事先は川向うです」

二人は足早に本所深川を抜けると東広小路に出た。

今日も広場には朝市が立って賑わっていた。

「俺の爺様は、なかなか顔の広い男でえ、御家人のくせにお店者から大工の棟梁（とうりょう）となかなか多彩な交わりを持ってました。揉め事を内緒で解決したりして重宝（ちょうほう）がられ、金に困ったことはなかったそうです」

両国橋を渡りながら、柳次郎が言い出した。

「ところがその倅（せがれ）の親父ときたら甲斐性なしだ。いつだってうちに銭があった試しなんてありやしない。一方、おふくろは愚痴しか言わないような女で、小言（こごん）を聞くのがいやさに親父は釣り竿を抱えて外に逃げる。釣れようが釣れまいが、おふくろと顔を合わせなければいいのです。」

柳次郎が初めて家庭のことに触れた。

「親父に釣り仲間が射ましてね、元大工町の蝋燭屋の明石屋参左衛門です。この男、還暦を超えてなかなかの道楽者（どうらくもの）だそうです。四、五年前に女房が死んだのをいいことに品川の若い女郎を身請けして、家の蕎麦に囲った。おきくは二十…」

「だいぶ年が離れていますね」

柳次郎の仕事というのがわからないまま、磐音は相槌を打った。

「四十を離れてます」

「で、何か問題が生じましたか」

「参左衛門は、近頃おきくが外に男を作ったようだ、浮気（うわき）をしているというのです。それを釣り仲間の親父に相談しましてね、親父が暇な倅を働かせようと、俺を説得してうまく手を引かせたら、明石屋はそれなりの金を用意するというのです」

柳次郎はどうだという顔で磐音を見た。

「間男（まおとこ）を探す男ですか」

「いやですか」

「そんなことを言える余裕はありません」

「それはこっちも一緒だ」

「おきくどのに男がいなかったら、おかねになりませんね」

「それはこれからの交渉次第です」

「もし駄目ならばどうします」

「参左衛門がそんな了見の狭い老人なら考えがあります」

「……」

「おきくに男がいたことにして、苦労して説得し、手を引かせたことにしてもいい。まあ、なんとでもなりますよ」

柳次郎がいい加減なことを言った。

磐音も他に仕事の当てがないのだから、黙ってついていくしかない。